安田女子大学紀要　38，91-101　2010.

大学における協働的な授業の試み

―― スピーチ・グループワーク・プレゼンテーションを用いた「日本語口頭表現法」の授業 ――

井　上　雅　彦

The Trial of a Collaborative Class in the University:

Preparation for the Class of “Japanese Oral Style”, Speech, Group Work and Presentation

Masahiko　Inoue

は　じ　め　に

これまで教育現場で用いられてきた「学習」という言葉が，「学び」という言葉に取って代わりつつある。「学び＝まねび」という言葉は，文化の伝承と再創造という社会的過程を起源とし，自らが課題を設定して，それを他者と協働的[1]に探究し，表現する実践という意味合いをもつ。つまり，「学習」が伝達モデルに基づく他者依存的・従属的な概念であるとすれば，「学び」は対話的モデルにもとづく自生的・自立的な概念である。

この「学習」から「学び」への言葉の移行は，社会構成主義，正統的周辺参加論に代表される状況論の台頭により，我々がこれまでの学習観の見直しを迫られていることが背景にある。つまり，個人を単位とした閉じた学習観から，社会に開かれた系の中で知識生成過程を捉える学習観への見直しである。この新しい学習観に立つと，「知識は外側から一方的に与えられるものでもないし，社会や文化と無縁な孤独な個人のいとなみとも考えない。知識は探求の結果自らが知識を構成していくものであり，また社会的な関係でそれらとの相互作用を通して獲得されるもの」[2]となる。人と人の相互作用の中に学力形成の契機を求めようとする考えだと言ってよいだろう。

従来，大学おいて，授業は「講義」という名で呼ばれ，教員のもつ豊かな知識と教養を学生に教え授けようとしてきた。また，学生は講義の内容を黙々とノートにとり，それを覚えてテストによって評価された。しかし，これからの学生は知の消費者にとどまるのではなく知の生産者になることが求められるであろう。

本稿においては，2008年度「日本語口頭表現法」の授業実践報告をする。この授業の目的は音声言語による効果的なコミュニケーション能力を養うことにあり，その特色はスピーチ，グループワーク，プレゼンテーションなどを用いて，他者の言葉のあり様を検討する協働的な授業だと

1）グループ内で何か課題を分担して作業を行う共同作業（cooperation　同じ対象に働きかける）と，グループとして何かを共有していく協働（collaboration　共に働く，耕す）をわけて考えたい（秋田喜代美『こどもをはぐくむ授業づくり』，岩波書店，2000年，p.76）

2）波多野誼余夫編『認知心理学５　学習と発達』，東京大学出版会，1996年，p.241

いうことである。この成果と問題点を明らかにすることによって，大学における協働的な授業の方途を探るのが本稿の目的である。

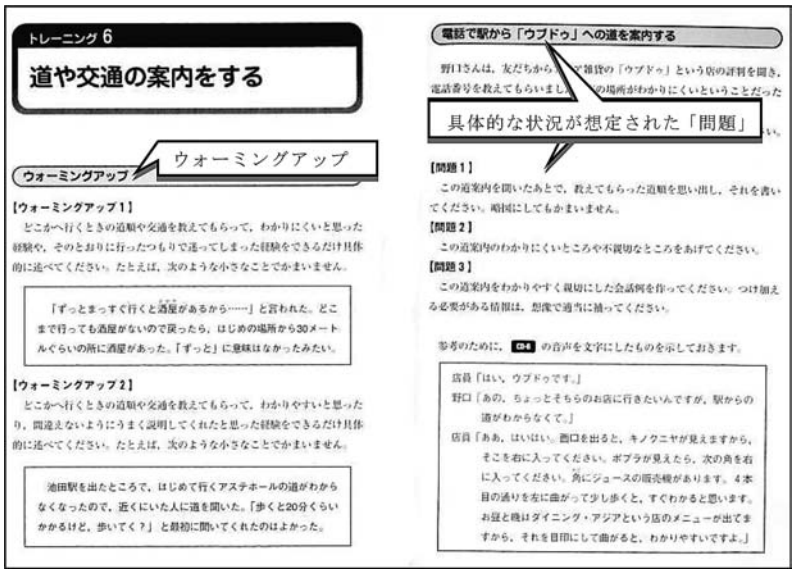
Ⅰ．2008年度「日本語口頭表現法」の概要

1．テキストの構成

テキストは『日本語を話すトレーニング』（ひつじ書房，2004）を用いた。このテキストはトレーニング１～15で構成されており，「スピーチをする」「プレゼンテーションをする」「面接を受ける」といったフォーマルな場面だけではなく，「問い合わせをする」「お願いをする」「道や交通の案内をする」「雑談をする」といった日常的な場面を多く取り上げ，実践的なリテラシー能力の向上が図れるように工夫されている。

各トレーニングは「ウォーミングアップ」，具体的な状況が想定された「問題」，「課題」という三部から成っている。「ウォーミングアップ」においては，トレーニングで取り上げる場面の成功例と失敗例を各自の経験にもとづき想起させるようになっている。例えば，【図表１】のトレーニング６「道や交通の案内をする」の場合，「ウォーミングアップ」においては，実際に道や交通の案内をする場面に遭遇した経験を具体的に述べて，案内がわかりにくかった場合や，逆にわかりやすかった場合を説明させる問いが設定されている。

【図表１】


トレーニング 6

道や交通の案内をする

ウォーミングアップ

【ウォーミングアップ１】

どこかへ行くときの道順や交通を教えてもらって，わかりにくいと思った経験や，そのとおりに行ったつもりで迷ってしまった経験をできるだけ具体的に述べてください。たとえば，次のような小さなことでかまいません。

「ずっとまっすぐ行くと酒屋があるから……」と言われた。どこまで行っても酒屋がないので戻ったら，はじめの場所から30メートルぐらいの所に酒屋があった。「ずっと」に意味はなかったみたい。

【ウォーミングアップ２】

どこかへ行くときの道順や交通を教えてもらって，わかりやすいと思ったり，間違えないようにうまく説明してくれたと思った経験をできるだけ具体的に述べてください。たとえば，次のような小さなことでかまいません。

池田駅を出たところで，はじめて行くアステホールの道がわからなくなったので，近くにいた人に道を聞いた。「歩くと20分くらいかかるけど，歩いてく？」と最初に聞いてくれたのはよかった。

電話で駅から「ウブドゥ」への道を案内する

具体的な状況が想定された「問題」

【問題１】

この道案内を聞いたあとで，教えてもらった道順を思い出し，それを書いてください。略図にしてもかまいません。

【問題２】

この道案内のわかりにくいところや不親切なところをあげてください。

【問題３】

この道案内をわかりやすく親切にした会話例を作ってください。つけ加える必要がある情報は，想像で適当に補ってください。

参考のために，CD-6 の音声を文字にしたものを示しておきます。

店員「はい，ウブドゥです。」
野口「あの，ちょっとそちらのお店に行きたいんですが，駅からの道がわからなくて。」
店員「ああ，はいはい。西口を出ると，キノクニヤが見えますから，そこを右に入ってください。ポプラが見えたら，次の角を右に入ってください。角にジュースの販売機があります。4本目の通りを左に曲がって少し歩くと，すぐわかると思います。お昼と晩はダイニング・アジアという店のメニューが出てますから，それを目印にして曲がると，わかりやすいですよ。」

次に，トレーニングの場面を具体化した５～６つの状況が想定されている。そして，そのコミュニケーション様態について問題点を指摘したうえで，改善策を考えさせるような「問題」が付されている。トレーニング６「道や交通の案内をする」の場合，「電話で駅から『ウブドゥ』への道を案内する」「電話ですずらん台駅から家までの道を案内する」「道に迷った人に電話で『ヒラルダ』までの道を案内する」「満願寺へ行くバスの乗り場を案内する」「学園祭に来る人に大学

までの交通案内をする」「東京から秋田までの交通を教える」といった具体的な６つの状況が想定され，各状況に応じた「問題」が付されている。

「問題」の後にはいくつかの「課題」が設けられている。「問題」で学んだことを復習する目的で作成されており，トレーニング６「道や交通の案内をする」の場合，次のようなものである。

課題１「今までに耳で聞いた道案内や交通案内について，迷わないようにわかりやすく伝えていると思ったことや，わかりにくく誤解をあたえやすいと思ったことをいくつかとりあげ，それぞれについてできるだけ具体的に説明してください。」

課題２「どこかからどこかまでの道順や交通を地図を使わないで話すとして，そのことばを，話すとおりに書いてください。〈中略〉なるべく説明がむずかしい所があるものをとりあげてください。そして，どの部分を説明するのが難しかったか，わかりやすくするためにどんな工夫をしたかについても述べてください。」

課題３「どこかへの道順や交通を口で説明するときに気をつけなければならない点をわかりやすくまとめてください。そのとき，よい例と悪い例をできるだけたくさん具体的に示してください。」

課題４「どこかに行くときの道順や交通手段をいろいろな人に聞いて，それぞれの答えを記録してください。そして，どういう説明がわかりやすかったか，どういう説明がわかりにくかったかを，具体例をあげながらまとめてください。人に聞く道順や交通手段は，なるべく説明がむずかしそうなものを選んでください。」

2.　シラバス

授業は【図表２】のシラバスにしたがって実施した。授業の最初２回はガイダンスを行った。第１回のガイダンスは授業概要の説明とノンバーバルコミュニケーションの重要性について理解させた。第２回は，グループワークの説明，グループ分け，プレゼンテーションの方法について理解を深めるとともに，スピーチの仕方，聞き方について講義した。

テキストのトレーニングは，15の中から学生にとって現実的な状況を扱っている11の場面を選択した。また，毎時間５名の学生にスピーチを行わせることにしたが，42名の学生に対して５名ずつだとセメスターに１人２回のスピーチを体験させられない。そこでスピーチだけを行うスピーチデーを設定した。

【図表２】

回数	授　業　内　容	回数	授　業　内　容
①	ガイダンス	⑨	トレーニング８　雑談をする
②	ガイダンス	⑩	トレーニング９　スピーチをする
③	トレーニング１　問い合わせをする	⑪	トレーニング10　会議で発言する
④	トレーニング３　お願いをする	⑫	トレーニング11　手順を説明する
⑤	トレーニング５　誘う、断る、謝る	⑬	トレーニング14　プレゼンテーションをする
⑥	トレーニング６　道や交通の案内をする	⑭	スピーチデー
⑦	トレーニング７　インタビューをする	⑮	トレーニング15　面接を受ける
⑧	スピーチデー		

3．授業の展開

授業は【図表３】のように展開した。90分の授業はスピーチ，グループワーク，プレゼンテーションと３つのパートで構成される。スピーチと評価・講評に20分，プレゼンテーションの準備のためのグループワークに30分，そしてプレゼンテーションと質疑応答に約40分をあてた。

【図表３】

1	①２分間 スピーチ ②スピーチに対する学生からの評価と指導者による講評	２分／人×５人＝10分 ２分／人×５人＝10分
2	③担当「問題」についての グループワーク	30分
3	④「問題」についての プレゼンテーション ⑤各グループのプレゼンテーションへの質疑応答と講評	10分／班×３グループ＝30分 ３分／班×３グループ＝９分

Ⅱ．「日本語口頭表現法」の授業の特徴

1．スピーチの指導

約２分のスピーチを学生はセメスターで２回行う。１回めは「今週のニュースから」というテーマを与え，２回めは自由テーマでスピーチするように指示した。また，次の①～⑦のスピーチ要領を示した。

①全体から話す　　「今日は～についてお話します」
②話を予告する　　「はじめに，まず，では」「次に，さて」「つまり，結論は」
③趣旨をはっきりさせる　　「ポイントは，私が一番言いたいことは」
④事実と意見を区別する　　「ありました」「あるでしょう」
⑤話のつながりを大切にする　　「その理由は」「例をあげますと」
⑥誰と，どこ，何をを明らかにする　５Ｗ１Ｈ
⑦しめくくりを大切に　　話の最後に全体をまとめる

さらに，よりよいスピーチを行うために心得ておくこととして，次の①～⑨について説明した。

①相手，場に応じて話す
②組み立てを考え，簡潔・明瞭に話す
③語尾を明瞭に
④聞き手の反応を確かめる（話のテンポ・反復）
⑤「相手にわかる言葉」「聞いて気持ちの良い言葉」「具体的な言葉」を使う
⑥聞き手の関心を引く（質問をするなどコミュニケーションを）
⑦誠実な態度を示す（明るく・さわやかに）
⑧一人ひとりに話しかける（アイコンタクト）
⑨時間内で話す（１分間　300 ～ 400字）

学生には，話し上手は聞き上手であり，聞き手は受け手という消極的イメージをもってはいけないこと，聞き手があってこそ話し手があるのだから，わかろうとする努力が必要であることを徹底した。そのうえで，聞き手には以下の三つの「聞く」が大切であることを伝え，スピーチに

対して学生からの質問や評価を求めた。

・口で「聞く」→あいづち　　・耳で「聞く」→情報を受け取る，問い返す

・目で「聞く」→メモをとる，アイコンタクト

2．グループワークのための準備

各トレーニングには５～６の状況が設定されているが，毎時間，指導者は次の授業で扱う状況３つを選択した。できるだけ同じような状況を避けるように心がけた。

次の例の場合，状況１～３はすべて「電話で」の道案内であるため，その中から１つを選択した。また，状況５と６は「交通案内」であるため，学生にとって身近な状況の５を選んだ。あと１つは，老人にバス乗り場を案内するという特別な条件がついた４を扱うことにした。

例：トレーニング６「道や交通の案内をする」の場合

状況１「電話で駅から『ウブドゥ』への道を案内する」

状況２「電話ですずらん台駅から家までの道を案内する」

状況３「道に迷った人に電話で『ヒラルダ』までの道を案内する」

状況４「満願寺へ行くバスの乗り場を案内する」

状況５「学園祭に来る人に大学までの交通案内をする」

状況６「東京から秋田までの交通を教える」

このようにして選んだ３つの状況を６グループに割り当てる。【図表４】のように，同一の状況を２グループが担当することになる。学生には，次時で扱うトレーニングの「ウォーミングアップ」を一読後，割り当てられた状況の「問題」を家で解いてくるように指示をした。

【図表４】

状況１	状況２	状況３	状況４	状況５	状況６
扱わない ：	１班 ２班	扱わない ：	３班 ４班	５班 ６班	扱わない ：

3．グループワークの方法

一人ひとりが家で考えてきた「問題」をグループにおいて検討する。このグループワークは，それを取り仕切る議長と，プレゼンテーションシート作成係，発表係，他グループへの質問係という役割分担のもと，円滑な進行を期した。

【図表５】の上段は家庭で考えてきた「問題」の解答，下段はグループワークでまとめた解答である。この下段部分を教材提示装置によってスクリーンに映しながらプレゼンテーションを行う。

左下には，「学園祭に来る人に大学までの交通案内をする」という個別の事例を一般化した，交通案内をする際のポイントが記されている。このように，グループワークにおいては，個別事例を一般化するように指示した。

【図表５】

先述のように，各状況について２つのグループが担当するが，グループワーク終了時点で，どちらのグループがプレゼンテーションをするのか，教員によって指定される。

4．プレゼンテーション

プレゼンテーションは，学生全員が「問題」を一読した後に行われる。プレゼンテーションの注意事項として，次の内容を徹底した。

【話し方】

○背筋を伸ばして聞き手の目を見て話す
○適度な大きさの声で話す
○聞き手の理解のスピードに合わせて話す
○聞き手にとって必要な指示を出す　（例：○○を見てください）
○問題点をわかりやすく指摘する
○修正箇所をわかりやすく説明する

【発表の手順と質問への対応】

①はじめの挨拶（発表者自己紹介と発表課題の紹介）
〈例〉「（　班名　）の発表者（　氏名　）です。（　班名　）では，○ページの状況○○について取り組みました。これから（　班名　）の発表を始めます。○ページの問題を見てください。」
②本題（課題の問題点の指摘と改善点，およびグループでの工夫点の発表）
〈例〉「この課題にはさまざまな問題があります。まず，……なので……です。次に…」
「改善した点について説明します。まず……という問題があったので，……のように書き直しました。次に…」
「では実際にやってみます。」
③終わりの挨拶
〈例〉「以上です。質問やコメントがありましたらお願いします。」

発表の最後に，スキット（寸劇）を演じさせているところに注目してほしい。音声言語の指導は実際に声を出してみることが大切である。具体的な状況をイメージしながら，理想的なコミュニケーションを演じさせる。

プレゼンテーション後の質疑応答は，学生に学びを深めさせる場である。そのために質疑応答は生産的なものでありたい。したがって，フロアの学生には，コメントの仕方，質問をする時の注意として，次の事柄を徹底した。

【コメントの仕方】

・不明な点を確認する。
・賛成意見や反対意見を述べ，発表者の考えを聞く。
・こうすればさらに良くなるのではないか，といった改善できる点を述べ，発表者の考えを聞く。

【質問する時の注意点】

・発表者を非難しない。

・発表者側に発見があるような指摘であるか考える。
・他の人も聞きたくなるような質問かを考える。

また，フロアから出た質問への対応の仕方を以下のように示した。

・質問者を尊重することが前提とされた返答を行う。
〈例〉「貴重なご意見をありがとうございます。」
「考えておりませんでしたので，この後みんなで考え直したいと思います。」
「ですが，～（自分たちの意見の説明）」

5．家庭学習

授業後に，学生はテキストの「課題」を１題選択して家で解き，次の授業で提出する。【図表６】は，トレーニング６「道や交通の案内をする」の「課題３」を家庭でまとめたものである（【図表５】と同一の学生のもの）。この学生は，道順や交通を説明する時に気をつけるべき点を４つ挙げている。１つめの「相手がいつどこから行くのかという点（相手の状況を確認すべし!!）」は，グループワークにおいて「一般化」したものである。また，３つめの「相手の理解度を確認する点」は，「一般化」はしなかったものの，気をつけるべきこととして出されたものである。

しかし，２つめの「口頭説明に頼りすぎていないかという点（視覚的にもうったえかける!!）」，４つめの「情報を多く与えすぎない点」はグループワークにおいては議論されず，他のグループのプレゼンテーションにおいて出された観点であった。このように，グループワークやプレゼンテーションといった協働的な活動をふまえて，より良いコミュニケーションのあり方を模索している。

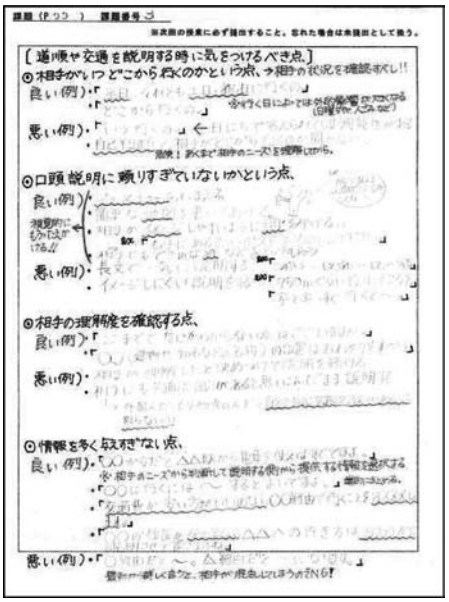
Ⅲ．評価の工夫

1．スピーチの評価

１回めのスピーチは，新聞やテレビなどから取材したニュースをもとに行われた。最初はニュースの紹介にとどまっていたスピーチが，しだいにニュースをもとにして自分の意見や考えを述べるスピーチへと変化していった。２回目からは身の回りや社会事象に材料を求めて，好きなテーマでスピーチを行うように指示した。１回目よりも広い範囲から材料を集めて，自分の意見や考えを主張するスピーチへと発展していった。

各スピーチに対して，聞いている学生から話し方や内容に関する意見を求めた。主旨を明確にして頭括型で話した，興味を引く工夫がされている，具体的なモノを提示しながら話している，聞き手と共通する話題を用いている，聞き手の反応を確かめて話している，アイコンタクトを心がけて一人ひとりに語りかけるようにしている，材料と意見の配分を考慮している，数字で信憑性を持たせているといっ

【図表６】



た，肯定的な評価が次第に多くなった。指導者は学生の評価の不十分な点を補って講評をしたうえで，Ａ～Ｄの４段階で評価を行った。

【図表７】

◇グループワークのルール◇

1．毎回、グループワークを取り仕切る議長を決める
2．議長は、グループメンバー全員がしっかりと意見を言うように司会する
3．議長は、グループメンバー全員がしっかりと他者に意見を反応するように促す
4．グループメンバーは、議論のグループ運営に協力する
5．議長とグループメンバー全員で、しっかりと発表できるものを仕上げる

グループワーク運営シート

●日時：＿＿月＿＿＿日＿＿時限

●議長（担当者）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

●グループメンバー
＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿

●課題名
（テキスト＿＿＿＿ページ）

●グループワークの評価
グループワークのルールを守り、生産的で友好的な議論ができたか
Ａ（できた）Ｂ（まあまあ）Ｃ（あまり）Ｄ（できなかった）

●議長のまとめ（グループワークを振り返って）

2．グループワークの評価

グループワークにおいては，【図表７】のような「グループワーク運営シート」を配布して，「グループワークの評価」欄に，受講者一人ひとりの自己評価を記入させた。指導者はこれをチェックしてＣ・Ｄ評価が散見される場合には個別指導を行った。

また，議長には「議長のまとめ」の欄に，当日のグループワークを振り返り，評価させた。グループワークの時間は30分と短い。その時間を有効に活用するために議長は苦労したようである。例えば，「問題点の指摘の時は，前の人が言ったこととかぶらないようにして時間の短縮をはかり，会話例を作るときには，『○○さんの～が良かった』と積極的に全員で作り上げました」「みんなで会話の問題点やどうすればよい話し合いができたかなどを考えて一般化し，それをふまえて会話例をどうするか話し合っていくことができたと思います。グループで協力して話し合っていくことができて，良かったと思います」と記しているように，グループワークの円滑な進行を目指して工夫・改善を行った。

【図表８】

プレゼンテーション採点表

＿＿＿月＿＿日＿＿曜日

◆採点者＿＿＿班＿＿＿＿＿＿＿＿　　合計得点

◆採点対象班　（　　）班

【課題の内容】
①　課題の問題点を適切に指摘できているか。
　◇非常に良い（５）◇良い（４）◇普通（３）◇よくない（２）◇お話にならない（１）
②　指摘した問題点を解消して会話例を作れているか。
　◇非常に良い　◇良い　◇普通　◇よくない　◇お話にならない
③　会話例に独自性、創造性（オリジナリティー）が感じられるか。
　◇非常に良い　◇良い　◇普通　◇よくない　◇お話にならない

【プレゼンシートの内容】
①　プレゼンシートは見やすいものになっているか。
　◇非常に良い　◇良い　◇普通　◇よくない　◇お話にならない
②　色や字の大きさなど視覚的に工夫されたものであるか。
　◇非常に良い　◇良い　◇普通　◇よくない　◇お話にならない

【プレゼンの内容】
①　発表者の説明はわかりやすかったか。（問題点の指摘と会話例との関連の説明など）
　◇非常に良い　◇良い　◇普通　◇よくない　◇お話にならない
②　発表者の熱意は感じられたか。（課題に取り組む姿勢をアピールできているか）
　◇非常に良い　◇良い　◇普通　◇よくない　◇お話にならない
③　発表者の態度はよかったか。（声の大きさやペース、姿勢など）
　◇非常に良い　◇良い　◇普通　◇よくない　◇お話にならない

【自分に対する評価】
①　この発表について何か疑問点や良かった点などコメントできたか。
　◇はい　　◇いいえ
　※「はい」と答えた人のみ、具体的にどのようなコメントをしたのか。

3．プレゼンテーションの評価

プレゼンテーションには，他のグループの質問係からコメントが寄せられる。例えば，トレーニング６「学園祭に来る人に大学までの交通案内をする」という事例のプレゼンテーションには，「二つの駅からのルートを示していたが，なぜ相手の最寄りの駅を確認してから，迷わずに行けるルートを示さなかったのか」「伝える方が相手の予想される最優先事項を挙げて，与える情報をできるだけ最低限にしたほうがいいと思う。伝える側が情報を取捨選択する方がいい」などというコメントが寄せられた。

また，プレゼンテーションは，【図表８】のシートを用いて，【課題の内容】【プレゼンシートの内容】【プレゼンの内容】という３

つの視点から８つの観点を用いて５段階で評価させた。そして40点満点で評価したシートは指導者が回収して，グループごとの平均を出した。各回の平均点を合算して，プレゼン大賞を決定した。

4．　学生の評定

評定は，次の３つの評価を点数化し，【図表９】のように出した。

◇家庭学習の評価

毎時間終了後，【図表５】【図表６】に示したようなプリントを回収して４段階で評価した。その10回分の平均。

◇スピーチの評価

スピーチは４段階で評価した。その２回の平均。

◇グループワーク，プレゼンテーションの評価

毎時間，学生のプレゼン採点表（40点満点）を合計して発表グループごとに平均を出した。その平均をセメスターを通して合算して，最上位のグループに属している者には６点，２位のグループに属している者には５点のようにして，最下位のグループに属している者には１点を与えた。

氏名	３回	５回	６回	７回	８回	９回	10回	11回	14回	15回	家庭学習	スピーチ	プレゼン	平均	評定
A	1	3	3	3	3	3	3	4	3	2	2.9	3.5	6	**4.1**	**4**
B	2	2	3	3	3	3	2	3	3	2	2.6	3.5	5	**3.7**	**4**
C	2	2	1	2	3	2	3	3	3	3	2.4	3	5	**3.4**	**4**
D	2	2	3	3	3	3	3	3	3	2	2.7	3.5	4	**3.4**	**4**
E	2	2	3	2	3	3	3	3	3	3	2.7	3.5	4	**3.4**	**4**
F	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	2.8	3	3	**3.1**	**3**

む　す　び

1．　学生による授業評価より

学生の授業評価（自由記述欄）に「今まで受けた中で一番おもしろかったです。グループで考え，まとめ発表する流れの授業をあまり受けたことがなく新鮮でした」と協働的な学びが楽しく新鮮であったという指摘がある。また，「自分の実力が付いたと実感する事が出来た授業でした。めりはりがあり，とても楽しかったです」と実力の伸長を実感した記述もあった。さらに，「私は，この授業への出席状況（遅刻・早退を含めて）が良かった」という設問の平均は4.3（５点満点），「私の受講態度（集中力・積極性など）は良かった」「総合的に判断して，この授業に満足した」という設問の平均は4.2という高い数値が出た。

近年の認知心理学の研究において，他者に説明することによって思考が明確になったり，他者を介在して異なる視点を導入することによって思考の葛藤や精緻化，明確化が図られたりすること，さらに自分の属する集団を意識することによって学習意欲が高まるという研究結果が出ている。つまり，上記の授業評価は協働的な学習によって生み出されたと考えられよう。

しかし，反面「スピーチにグループワークにプレゼンにと，１時間にやることが盛りだくさんすぎる気がした。少し人数が多い気もする」という授業評価があるように，42人の学生を対象に

協働的な授業を構成する困難さを指摘する者もいた。それが，「授業の進度は適切である」という設問の平均が3.7という低い数値となって現れていると思われる。つまり，協働的な授業が機能し，互いに教え合い学び合う関係が成り立つためには，少ない人数で，じっくり時間をかけて「探究－情報の共有－表現」の往還過程を経験させることが重要なのである。

2．レポート課題「コミュニケーションにとって大切なことは何か」より

この授業は，他者の言葉のあり様を，言葉を用いて検討するというメタ言語活動が中心になっている。つまり，友人のスピーチを通して望ましいスピーチのあり方について考える。テキストに描かれたコミュニケーション様態をグループワーク・プレゼンテーションを通して検討するといったようにである。学生は友人のスピーチを通して，自己のスピーチについて省察を迫られる。また，テキストに取り上げられた具体的なコミュニケーション様態について語る自らの言葉を振り返ることになる。それは，次の学生の言葉に表れている。

私はこの授業を通じて，相手意識を持つことの大切さを学びました。特に，グループワークでは，話し合いをする姿勢を含め，話し方，内容，すべてのことが相手に対しての思いやりがなければ，成り立たないものであると感じました。今まで，自分の意見を主張していく場のほうが多かったので，みんなの意見を聞きながら，取りまとめるという部分ではとても苦労しました。

また，スピーチをする際は相手意識だけではなく，状況を考慮することの大切さや，話す内容の面白さも考えることが大切なのだということに気づきました。前で話すのは苦じゃない分，スピーチとして適切でない言葉を用いたり，内容を深く考慮することなく話してしまったりする部分があるので，そこは改善していきたと思います。

しかし，レジュメの書き方においては，自分のものが見本になることができて，嬉しかったです。（K.K）

学びの対象となる言葉の様態とそれについて語る自らの言葉という二重性を，他者との協働的な学びのなかで浮き立たせることによって，学生はより言葉に敏感になり，コミュニケーションのあり方を深く探るようになるのであろう。

次の記述には，コミュニケーションに正解はないと書かれている。コミュニケーションには，状況，場所，相手，目的などを考慮して，自己の主張をどのように相手に伝えるのかを絶えず調整していく必要があると感じている。そして，コミュニケーションの最終目的は良好な人間関係の持続であるとの認識を示している。

〈前略〉私が考えたことは，ＴＰＯをわきまえることが大切であるということだった。もちろん，お互いに相手の言いたいことを推し量ることは大切であるが，それには，状況，場所，相手，目的などを把握して，失礼がないようにする，最終の目的は，相手との人間関係が悪くならないようにすることである。相手への態度，言葉遣いは，場所や目的（頼み事など）によって変わってくる。状況によって様々ではあるが，「親しき仲にも礼儀あり」で，円滑な人間関係を築いていければよい。授業を通じて学んだことは，コミュニケーションのしかたは様々であり，一概に，これが正しいというものはない。しかし，その中で最善であるものを選択し，目的達成のために活かす。いずれにせよ，相手に失礼のないように，状況によって，言葉や態度を選ぶのは大切だと考えた。（Y.C）

このように学生は，テキストに取り上げられた様々な状況において，どのようにコミュニケーションをとるのかを協働的に検討していった。そのなかで，各人が各様にコミュニケーションにとって重要なことを模索し，把握していったのである。

参　考　文　献

野田春美他「プレゼンテーション指導と連動させた文章表現教育法の実践報告」人文学部紀要第26号, 2006年.
野田春美編「『日本語を書くトレーニング』を用いた授業の実践報告」神戸学院大学人文学部研究推進費 2003-2005年度研究成果報告書, 2006年.

〔2009. 9. 28　受理〕